

つ真猿類である。このうちのオマキザル科 (Cebidae) のものは大臼歯が各側各顎3本だが、キヌザル科 (Callithricidae) のものは2本である。この両科の関係をしらべる方法の一つとして大臼歯の大きさの変化や形態の変化を「退化」という点からしらべる方法がある。今回は、オマキザル科のなかでも比較的原始型にちかいと考えられているリスザル (*Saimiri sciureus*) を中心として、同科のものの上・下顎大臼歯の退化示数をしらべて比較した。

リスザルの大臼歯では、上・下顎ともに遠心にいくにしたがって近遠心径・頬舌径が小さくなっている。退化率は下顎歯よりも上顎歯のほうが大きく、またそのうちでも頬舌径より近遠心径のほうが大きな退化傾向を示している。上顎の近遠心径で退化率が大きいのは、遠心側の咬頭のほうがいちじるしく退化していることによるものである。M1からM2への退化率は、上・下顎ともにほぼひとしい。遠心の歯ほど退化率がおおきくなること、すなわちM1>M2>M3の傾向は、オマキザル科のクモザル、キャプチン、ヨザルにもみられるが、リスザルのように著しいものはない。同じ科でもホエザルは全くことなった傾向をしめしている。上顎はM2>M1>M3で、下顎はM3>M2>M1で他のオマキザルとは逆である。ホエザルのうちではクロホエザルの上顎M3の退化率がやや大きい、それも近遠心径だけで頬舌径は歯の順による大きな差はない。

リスザルにみられる一般的傾向やホエザルにみられる特異性については、今後、形態とのつながりや調査例数をふやすことなどによって追求してゆくつもりである。

霊長類歯冠表面の磨耗痕と咬頭の関係について

羽 倉 信 彦 (獨協医大)

歯の咬合と、顎運動との関係についての研究は、霊長類を含む哺乳類においてなされてきており、咬頭や稜によって細かく区分された磨耗面が、報告されている。しかし、そこにみられる磨耗痕については、多くの情報をもたらすとされながらも、解析の困難さから研究が立遅れてきた。

従来より、SEMによって、磨耗痕の調査を行っ

ているが、資料によっては金・カーボン等の蒸着が、貴重な標本を損い、不適当である場合もある。そのため、歯のプラスチック鋳型レプリカを、採取することとした。

今回は、霊長類研究所内および、日本モンキーセンターにて、原猿類5個体、広鼻猿類33個体、狭鼻猿類21個体の、鋳型レプリカ用モールドを採取した。モールド用樹脂には、粒子の細かいもの(信越シリコンKE 1400)を使用した。このモールドに、エポキシ樹脂(エポック 812, 応研商事, A:B=1:1)を注入し、減圧によって気泡をとりのぞいた。

現在、こうして得られたレプリカに、金蒸着を施し、SEM(日立S-650)にて観察し、写真撮影中である。

レプリカの磨耗痕再現能力は、同一モールドから、2回得たものにおいても、1500倍まで、原材料とほとんど対応している。したがって磨耗痕の観察に、通常必要な低倍(500倍まで)には、支障のないことが明らかとなった。

今後、各磨耗面を精査し、タブレットデジタルイザー等によって、磨耗痕を数量化してゆく予定である。

視床下部外側隆起核の線維結合

藤 井 正 子 (東大・医)

我々はネコにおいて、内側前脳束—視床下部後部の限局した4部位—視床後外側核の外縁部—帯状回前部に到る投射系を指摘したが、この投射系の中継部位である視床下部後部域の4つの細胞集団はサルでは存在しない。かわりに、ヒトを含む霊長類では視床下部の上部の外縁部にネコでは存在しない外側隆起核がよく発達している。両者を比較すると、乳頭体の外方に出現するネコのこれらの部位とサルの外側隆起核は部位的には多少異なるが、均質な細胞集団からなり周囲の組織との境界が明白で、複数の細胞群からなる点など似ている。そこで両者の関係をより明確にするため、外側隆起核の線維連絡の研究を行った。

実験動物は日本ザルあるいは赤毛ザルで、腹方接近により視床下部の表面に存在する外側隆起核に西洋わさびからとれたペルオキシダーゼ(ペリンガー製, 50% 0.02~0.04 μ l)あるいは、レク